『三体詩幻雲抄』に見える擬音語・擬態語

劉　　玲

キーワード：三体詩幻雲抄、擬音語・擬態語、抄物、日葡辞書

要　旨

本稿は、室町時代の抄物の一つである『三体詩幻雲抄』をとりあげて、当資料における擬音語・擬態語の使用実態（13タイプで、62語計134例）を調査し、当時のその他の抄物資料及び日葡辞書との比較を通して、当資料の擬音語・擬態語の性格について検討したものである。すなわち、当資料では、特殊な語が見られるものの、多用される語形タイプと語はその他の抄物と共通している。また、室町時代の口語を基盤としている点で、日葡辞書における語彙の基本的な性格との類似が窺える一方で、当資料には用例の多い語が日葡辞書に見えない点、日葡辞書より語形上の多様性をもつ点、日葡辞書に見えないが現代にまで受け継がれてきた語を含む点で、当資料の特色を見ることができる。

0　はじめに

中世につくられた数多くの抄物資料の中に、三体詩[1]の諸種の抄物がある。三体詩は、中国の宋の人周弼が淳祐十年（1250）に編んだ唐詩の選集である。日本に伝来された時期は未だ明確にされていないが[2]、室町時代になると、五山の禅僧を中心に三体詩の抄物がたくさんつくられていた。坪井（1977）では8種ほど、谷澤（1977）では14種ほどを指摘している[3]。

ところで、坪井（1977）と谷澤（1977）以降、三体詩の抄物に関する新たな論考は見ないようである。筆者は、『三体詩幻雲抄』（以下「幻雲抄」とする）を中心に、三体詩の抄物における語彙・文法・音韻・表記・文章・漢籍の引用状況などについて研究を進めている（劉〈2005〉、劉〈印刷中〉）。この研究の一環として、本稿では、幻雲抄における擬音語・擬態語（「暁光ノキラキラトシタナリ」「茶臼ヲハタハタト敲」のキラキラやハタハタの類で、象徴詞やオノマトペと総称されるもの）に注目する。

以下、1節では、幻雲抄の基本的情報及び幻雲抄を研究対象とした理由を述べる。2節では用例の調査を行う。3節と4節では、当時のその他の抄物と日葡辞書との比較を通して、幻雲抄における擬音語・擬態語の性格を考える。5節では、本稿で明らかにした

ことをまとめ、今後の課題を述べる。

1　幻雲抄の基本的情報、及び幻雲抄を研究対象とした理由

幻雲抄の基本的情報については、次のとおりである（詳細は坪井〈1977〉を参照）。

成立時期・抄者：五山の学僧である月舟寿桂（号は幻雲、1460～1533）が、先人の三体詩に関する講義・所説などを解体・集成したものを、その弟子の継天寿戩が整理・補説して、大永七年（1527）に成った。

使用テキスト：中田祝夫編・抄物大系所収（影印本）『内閣文庫蔵天文五年写本　三体詩幻雲抄』（坪井〈1977〉の解説を附す）。第一冊・第二冊・第三冊・第四冊・第五冊の五冊からなる。

底本：国立公文書館内閣文庫所蔵「増註唐賢絶句三体詩法幻雲抄」、天文五年（1536）写本。

原典テキスト[4]：「増注唐賢絶句三體詩法」（「巻之一」の巻頭にある）。いわゆる天隠注に裴庾注を増注したもの。

幻雲抄について、坪井（1977〈615ページ〉）は、次の三点ですぐれた資料となるものだと評価している。これも、本稿でこれら三体詩諸種の抄物から幻雲抄を研究対象として選んだ理由である。

・天文五年書写で、現存する室町時代の古写本として貴重である。
・五山における三体詩研究の集大成である。
・仮名文・漢文ともに多くの抄文を含み、中世後半の国語資料として利用価値が大きい。

2　擬音語・擬態語の採取とその結果

本節では、幻雲抄においてどのような擬音語・擬態語が使われているかについて調べる。

2-1　用例採取の基準

まず、先行研究を紹介した上で、どのような語を擬音語・擬態語として採取すべきかについて、少し述べておきたい。

周知のとおり、一般語が無縁的記号といわれるのに対して、擬音語・擬態語はいわゆる「有縁性」を有する。すなわち、擬音語・擬態語においては、その音形と意味（種々の声や音または音響、状態・様子）との間にある程度自然的なつながり、つまり音象徴を認め得るとされる。ただ、擬音語・擬態語の概念それ自体は原理としては明確なものだが、「音形と意味との間に自然的なつながりを認め得る」ことは、あくまで抽象的な概念である。実際、擬音語・擬態語と一般語とを見分ける絶対的な基準があるわけではな

い。従来、比較的多く採用された基準は、次のとおりである。

a　連濁現象を起こさない。

b　象徴詞となる語基が派生関係をもたない。

c　アクセントが始めに来る。(山口〈1971〉によるまとめ)

このような基準について、山口（1971）はかなり不完全なものだと指摘しているのである（その他寿岳〈1956〉182ページ～184ページ、鈴木〈1984〉160ページ～162ページ、大坪〈1989〉18ページなどにも言及がある)。すなわち、aでは、反復しても濁音になり得ないア・ナ・マ・ヤ・ラ・ワ行については適用できない。bでは、例えばノロノロに対してノロイのような派生関係があるにしても、現実の人々の語感によれば擬音語・擬態語と見なされている。cでは、ＡＢン型、ＡＢット型、ＡＢリ型、ＡッＢリ型、ＡンＢリ型（ＡとＢはそれぞれ仮名一つを示す）以外のパターンには全くあてはまらない。また、古典語についてほとんど適用できない。

このような事情は、幻雲抄における擬音語・擬態語の判断についても同様である。例えば、以下に見えるヤスヤス（aの基準)、ノヒノヒ（伸ブ→伸ビ→ノビノビという派生関係が想定できる）（bの基準）については判断できない。また、アクセントが始めに来るかどうか（cの基準）は知り得えないわけである。

(1) 花カ、イクラモヤスヤスト軽折也。[259ページ][5] 暁紅軽折露香新

(2) ノヒノヒ[6] トシタ意ハアルト見ヘタソ。[311ページ]

したがって、本稿では、用例採取の際、一応の目安として次の二点を考慮する。つまり、

①擬音語・擬態語の語形タイプに合致する。

②それと派生関係にあると考えられる語とのつながりよりも、一般に音感の方を強く意識して、語音と意味との間に緊密な関係が認められる。

というような語は、擬音語・擬態語として認めておく。

具体的に、①語形タイプについては、国金（1975）に掲げたものを基準にする。同著では、抄物約103種に見られる擬音語・擬態語について、語形の上から「基本形」・「促音挿入形」・「促音挿入＋反復形」・「反復形」の四種類、計73タイプ（あわせて625語）に整理・分類している。また、②語音と意味との間に緊密な関係が認められるか否かについては、その同列語が存在するか否かを条件とする。同列語とは、すなわち、ある擬音語・擬態語Ｘに対して、Ｘと同一の語基からできた語Ｙ、またＹから派生した語Ｚは、先に述べた①の語形タイプにあてはまれば、Ｘの同列語であると考える。例えば、ユルユル（(3)）に対して、「同一の語基ユル＋リ語尾」でできたと考えられるユルリ（(4)）、またユルリを反復してできたと考えられるユルリユルリ（(5)）は、ユルユルの同列語とする。このように、ユルユルはユルシから導かれたと考えられるが、その同列語が確認できる場合は用例として認める[7]。

(3) トコモ、暖ニ、ユルユルト、ナリテ、天恩モ、遍ホトニ。[224ペ] 江海茫々春欲遍

(4) ことの外のどがかはく、ゆるりと茶をたべふ。[狂言・時（北原保雄・池田廣司『大蔵虎明本狂言集の研究　下』222ペ）]

(5) 従ト(ユルス時ニ)ハ、ハナチユルスヲ云。ユルリユルリト吹ヲ云也。[応永二十七年本論語抄・八佾第三（抄物大系179ペ）]

2-2　用例採取の結果

以上のような方針で用例の採取を行った結果、62語計134例を得た。次の一覧表[8]に示されるとおりである。

【表】

ＡＢＡＢ型…19語25例：	エリエリ3、キラキラ、キロキロ、クイクイ、コロコロ、スコスコ〈スゴスゴ〉、スラスラ、タフタフ〈タブタブ〉、チロチロ、トクトク、ノヒノヒ〈ノビノビ〉2、ノロノロ、ハタハタ〈バタバタ〉、ヒラヒラ、ミルミル3、ムカムカ、ムサムサ、ユルユル、ヲホヲホ〈ヲボヲボ〉2
ＡＢリ型……10語15例：	ガラリ、キラリ、サラリ、スラリ、スルリ、ソロリ、タラリ〈ダラリ〉2、チラリ、トロリ、ハラリ〔パラリ〕5
Ａッ(ト)型…９語45例：	ウアツ、サツ〈ザツ〉14、スツ6、ソツ11、チヤツ6、トツ〈ドツ〉、ヒヨツ3、フツ2、ホツ
ＡＢ型……７語21例：	キカ2、シカ2、スキ、ミシ、ムス〈ムズ〉11、ムタ、メタ3
ＡッＢ型……６語17例：	キツカ11、クツタ〔グツタ〕、シツカ2、スツキ、トツホ〈トツポ〉、ホツカ
ＡＢリＡＢリ型……3語3例：	チロリチロリ、ヒラリヒラリ、フラリフラリ
ＡッＢリ型……2語2例：	ウツカリ、クツタリ〈グツタリ〉
次の６タイプ……6語6例：	
	ＡッＡッ（ト）型：ソツソツ　ＡＡ型：チヤチヤ　ＡッＡ型：カツカ
	ＡッＢッ（ト）型：カツハツ〈ガツパツ・カツパツ〉
	ＡッＢＡッＢ型：ヒツカヒツカ〔ピツカピツカ〕　ＡＢリＣＢリ型：ユラリクラリ

これら62語について、語形上、13タイプ[9]に分類することができる。

異なり用例数の多い順で示すと、ＡＢＡＢ型（19語）－ＡＢリ型（10語）－Ａッ（ト）型（9語）－ＡＢ型（7語）－ＡッＢ型（6語）－ＡＢリＡＢリ型（3語）－ＡッＢリ型（2語）－ＡッＡッ（ト）型以下6タイプ（各1語）となっており、ＡＢＡＢ型が最も多い。延べ用例数の多い順で示すと、Ａッ（ト）型（45例）－ＡＢＡＢ型（25例）－ＡＢ型（21例）－ＡッＢ型（17例）－ＡＢリ型（15例）－ＡＢリＡＢリ型（3例）－ＡッＢリ型（2例）－ＡッＡッ（ト）型以下6タイプ（各1例）となっており、Ａッ（ト）型が最も多い。

また、全体から見て、擬態語として使われると見られる語のほうが多い。

ハタハタ・ガラリ・ウアツ（ト）の3語は擬音語としてのみ使われていると見られる。次に見るように、ハタハタは「茶臼」を叩く音を、ガラリは「金鎖」（鍵のこと）が門にぶつかって立てる音を、ウアツ（ト）は「角」（角笛のようなもの）の鳴り出す音を表す。

（6）村云、茶臼ヲ、ハタハタト敲コソ、アツツラウ、我目ノ醒タハ、アレテ、アリケル也。[596ペ]

（7）金鎖ハ、ガラリト、宮門ニ、サシテ。[291ペ]

（8）鳴軋――桃云、鳴軋ハ、角ノ、ウアツト鳴リ出声ナリ。[589ペ] 鳴軋江楼角一声

また、サツ（ト）は、(9) では瞬時に晴れる様子を表す。(10) では風が急に吹いてくる様子を表す擬態語用法と見られるが、風の音をも伴っていると理解できるので、擬音語用法を兼ね持つ擬態語である。

（9）一夜フツタ雨カ、今朝ハ、サツト晴ホトニ。[307ペ]

(10) イト物スコキニ、秋風カサツト吹テアレハ。[384ペ]

(10) の場合と同じく、次のトクトク[10] は、「涓々」の語釈として水がちょろちょろと流れるさまを表すが、音をも伴っているように理解できるので、擬音語用法を兼ね持つ擬態語であると解釈される。

(11) 涓々ハ、トクトクシタヽレノ落ヲ云也。[470ペ] 籬外涓々澗水流

以上、擬音語のみとして使われる語（ハタハタ・ガラリ・ウアツ（ト））、擬音語用法をもつ擬態語（サツ（ト）・トクトク）の7語以外は、すべて擬態語としてのみ使われると見られる。前掲 (2) のノヒノヒや (3) のユルユル、後掲 (12) カツハツ（ト）以下の諸語がそれである。

3　その他の抄物との比較から見た幻雲抄の擬音語・擬態語の性格

本節では、2節に一覧した幻雲抄の擬音語・擬態語（13タイプ62語）について、当時のその他の抄物における使用状況と比較することによってその性格を考えてみる。比較の対象とするのは、次の三つの資料におさめた116種の抄物である。

a　国金（1975）：抄物約103種に見られる擬音語・擬態語625語を語形上から73タイプに整理・分類している。

b　『抄物資料集成　別巻索引篇』（岡見正雄・大塚光信編〈1976〉清文堂）：
史記抄・毛詩抄・蒙求抄・四河入海の4種についての語彙索引に掲げた擬音語・擬態語。

c　『続抄物資料集成　第10巻解説・索引』（大塚光信編〈1992〉清文堂）：
杜詩続翠抄・漢書抄・古文真宝桂林抄・古文真宝彦龍抄・山谷抄・荘子抄・日本書紀兼倶抄・日本書紀桃源抄・百丈清規抄の9種についての語彙索引に掲げた擬音語・擬態語。

幻雲抄とその他の抄物と比較して、以下のようなことがわかった。

①幻雲抄の13タイプは、すべてaに示した73タイプ中に見えるので、幻雲抄の語形タイプは当時の抄物資料に共通して使われているとわかる。

②幻雲抄の13タイプのうち、ＡッＢッ型（2語）とＡラリＣラリ型（3語）以外の11タイプは、aに示した73タイプのうち、多用される上位17タイプの中に見えるので、幻雲抄の語形タイプはほとんど当時の抄物資料でも多用されると言える。以下にこれら12タイプの73タイプにおける順位を示す。なお、ＡッＢッ（ト）型とＡＢリＣＢリ型は逆順位で2位と3位にある。

1位：ＡＢＡＢ型（116語）　2位：ＡッＢ型（68語）
3位：ＡＢリ型（62語）　4位：ＡＢ型（59語）
5位：Ａッ（ト）型（34語）　6位：ＡッＢリ型（24語）
7位：ＡＢリＡＢリ型（22語）　9位：ＡッＡッ（ト）型（17語）
11位：ＡッＢＡッＢ型（15語）　17位：ＡＡ型（8語）・ＡッＡ型（8語）

③幻雲抄の62語について、用例数[11]（延べ用例数）の多い順で示すと、以下のようになる。

14例：サツ（ト）　11例：キツカ・ソツ（ト）・ムス
6例：スツ（ト）・チヤツ（ト）　5例：ハラリ
3例：エリエリ・ミルミル・ヒヨツ（ト）・メタ
2例：キカ・シカ・シツカ・タラリ・ノヒノヒ・フツ（ト）・ヲホヲホ
1例：その他44語

④用例数5例以上の7語は、すべてその他の抄物のうち18種以上に見え、また、用例数2～4例の11語中エリエリ以外は、すべてその他の抄物のうち3種以上に見える。これらは、幻雲抄だけでなく、抄物資料に普通に多用される語と言える。なお、用例数1例のみの44語のうち、⑤に示した14語以外は、3種以上の抄物に見える。

⑤次の14語は、ほとんど1例のみで（エリエリは3例）、しかもその他の抄物に見えない、または1種か2種の抄物にだけ見える。

その他の抄物には見えない…3語：カツハツ（ト）・キロキロ・クツタリ
その他の抄物1種に見える…7語：エリエリ・タフタフ・チロリチロリ・ノロノロ・ミシ・ユラリクラリ
その他の抄物2種に見える…5語：ウツカリ・クツタ・チロチロ・トクトク・ホツカ

これら14語は、幻雲抄がもつ特殊な語と言える。以下に若干例を挙げる。

(12) 其承ト接トノ間テ、転換ヲ加テコソ、面白ケレソ、起シ承テ、第三句テカツハツト転換シテソ。[374ペ]
(13) 目ハカリ、キロキロトシテ、冬ニハ、アルクト、云ソ。[592ペ]
(14) 李穆ハ、長卿カ婿チヤトアルホトニ、舅ノ処ヘ、エリエリト来タソ。[453ペ]
(15) 山色空濛、湖光瀲灩トモ、云イ、酒ヲ十分瀲灩ト云ハ、皆タフタフトシタ皃ヲ云ホトニ。[589ペ]
(16) 空ニチロリチロリト、日ニ輝テ。[447ペ]
(17) 籬ノ外ニハ、只ノロノロト磵水ノ流マテナリ。[471ペ]
(18) 其時此武関ヲ、ミシトサシテ、懐王ヲ、カヤサヌソ。[306ペ]

(19) 拗ハ、捩字ト、同意也、物ヲ、ネヅル也、ホツカト折ルヽ木モ、アレトモ。[568ぺ]

以上見てきたとおり、幻雲抄は特殊な語（⑤）をもつ一方、語形上（①②）及び用例の多い語（③④）に注目してみると、幻雲抄で多用される語形及び多用される語は、その他の抄物と共通していることがわかる。

ただ、上記の見通しは、その他の抄物に関する論文と索引で見た限りのものである。それぞれの抄物で確認し、または、比較の資料を広げれば、この見通しを修正する必要があろう。また一方、幻雲抄がもつ特殊な語としてカツハツ（ト）など14語を指摘したが、実際、それら抄文の冒頭に「桃抄云」（桃源瑞仙（12））や「桃云」（同上（13）～（17））、「村義」（希世霊彦（18））、「續翠云」（江西竜派（19））と示されるように、桃源瑞仙の所説[12]の引用中に見られるものが多い。この事実によれば、幻雲抄がもつ特殊な語というのは、ほとんどが桃源瑞仙に多用される語であるということにもなろう。

4　日葡辞書との比較から見た幻雲抄の擬音語・擬態語の性格

以下、幻雲抄の擬音語・擬態語について、日葡辞書（土井忠生・森田武・長南実編訳『邦訳日葡辞書』岩波書店）と比較してみる。

全体から見て、次の①と②に述べるように、幻雲抄と日葡辞書の擬音語・擬態語には、性格の根本的な違いはないと言える。

①幻雲抄の62語中、34語（前掲の一覧表に＿＿線を引いていない）つまり5割強の語は日葡辞書に記載されていないが、キラキラなど約5割（28語）は日葡辞書所載の語と語形・意味が一致するのである。また、3節④に示した用例数5例以上の7語中6語（計53例）、及び用例数2例以上の11語中4語（計9例）は日葡辞書に見える。これらはあわせて61例で、全用例数（134例）の約5割を占めるのである。このことは、両者の語彙の基本的な性格の類似、すなわちともに室町時代の口語を基盤としていることを示すものと言える。

②幻雲抄にある特殊な語を見ると、3節⑤に掲げた14語のうち、エリエリ（3例）以外はすべて1例だけなので、用例数の少ない語が多い。一方、これら14語のうち、キロキロ・タフタフ以外の12語は、日葡辞書には見えない。つまり、幻雲抄の特殊な語は、日葡辞書に記載のない語であるという類似性が窺える。

しかし一方、①に述べたように5割強が日葡辞書に見えないという違いに注目すれば、以下の③④⑤⑥から幻雲抄の擬音語・擬態語の特色を窺うことができる。

③キツカ（11例）のように用例の多い語、及びヒヨツ（ト）・メタ（以上は3例ずつ）、ノヒノヒ（前掲（2））・ヲホヲホ・キカ・シツカ（以上は2例ずつ）のように2例以上ある語も、日葡辞書に見えない。これらは、すべて3種以上の抄物（3節④）に見えるので、抄物に普通に使われる語であり、抄物と日葡辞書の語彙の違いを示す語と言える。以下に若干例を挙げる。

(20) 此亭ノ中ヘ尽ク収マリテ、見ユル也、分明ニキツカト見ユル也。[170 ペ]
(21) 山中ニテ、不思依、ヒヨツト、相逢ホトニ。[330 ペ]
(22) メタト酔テ烟雨中ノ、ヤウニ、見ナイタト云カ、面白ソ。[391 ペ]
(23) 竹色カ、ヲホヲホトシテ、如烟ナソ。[546 ペ]
(24) 言其部類ノ中テモ、トリワケテ、独キカト第一美人ニ見ユル也。[104 ペ]
(25) 昔ハ、関内関外モ、シツカト、ツクリ。[572 ペ]

④幻雲抄では、キラキラーキラリ、スラスラースラリ（後掲（37））、チロチローチロリチロリ（前掲（16））、ヒラヒラーヒラリヒラリ、キカ（前掲（24））ーキツカ（前掲（20））、シカーシツカ（前掲（25））、スキースツキ（後掲（45））、クツタークツタリ（後掲（43））のように、両方の語形をもつ場合が多い。

(26) 淡灔ヲ、微陽ニ見ハ、暁光ノキラキラトシタナリ歟。[589 ペ]
(27) 皚々ハ、キラリトシタル也。[555 ペ]
(28) 故事ヲ、多ク、用トモ、更ニ、コセリ、メカス、スラスラトシテ、用事ノ詩トモ、ミエヌ。[498 ペ]
(29) 漁火モ、チロチロトシテ夜アケカタ也。[134 ペ]
(30) 酒旗モ、風ニヒラヒラトシテアルソ。[391 ペ]
(31) 御柳ナントカ、春風ニ、ヒラリヒラリトシテ、サヽメクナリ。[443 ペ]
(32) 或説ニハ、張祐カ、詩ト云カ、是トシタカ、シカト本拠アルヤラウソ。[531 ペ]
(33) 一盃コホレコホレウケテ、スキト飲テ。[344 ペ]
(34) 几ニヨリカヽリ、クツタト、眠リテ。[596 ペ]

これに対し、日葡辞書ではこのような両方の語形をもつ場合が少ない。上記 8 組中、日葡辞書において両方の語形とも見られるのは、キラキラとヒラヒラの 2 組のみである。これは、幻雲抄と日葡辞書とは同一時期ではないという時代的な違いを表すだけではない。日葡辞書の規範的な性格に対し、幻雲抄の多様性を示しているのであり、幻雲抄の方がより実際の話し言葉の状態を反映していると考えられる。

⑤また、Cafato・Gafato・Cappato ーカツハツ（ト）（前掲（12））、Ficafica ーヒツカヒツカに見るように、日葡辞書における促音を含まない語形に対して、幻雲抄が促音を挿入してある形をとる場合がある。ほかに、日葡辞書にはユラリクラリがないが、ユラリユラリとクラリクラリの二つがある。この語は、抄物という注釈を行う作業の中で、即興的に二つを組み合わせたのではないかと推測される（柳田〈1971〉にいう「同義類義の擬声擬態語を重ねて用いる用法」〈32 ペ〉）。このような例は多くないが、これも、やはり幻雲抄の方がより実際の話し言葉の状態を反映していると言える。

(35) 其時、蛍カ、只一ツ、ヒツカヒツカトシテ照レタ。[221 ペ]
(36) 我モ、江湖ヘ帰ラウト、思ヘトモ、ユラリクラリトシテ、未帰ト云義モ、アレトモ。[482 ペ]

⑥幻雲抄は、日葡辞書にはない（4 節①）現代にまで伝わってきた語を含む。それら 34 語中、ノヒノヒ（前掲（2））・ノロノロ（前掲（17））・スラリ・チラリ・スツ

（ト）・ヒヨツ（ト）（前掲（21））・ホツ（ト）・フラリフラリ・ウツカリ・クツタリなどのようにそのままの形[13]、あるいは、タフタフ（前掲（15））→ダブダブ、スツキ→スツキリなどのように少し変化した形（矢印の指す形）で現在も用いられている語がある。これらの多く（3節④）は、当時の抄物に普通に見えるので、幻雲抄を含む当時の抄物語彙と現代語とのつながりを示す語であり、幻雲抄の特色の一つと言える。

(37) 此詩毎句使故事、サレトモ、コセリメカスシテ、スラリトシテ面白キ詩也。[148ペ]

(38) 此我等カ人間ノ甲子ハ、須臾刹那ノ間テ、人ノ一生ハ、チラリト通ルソ。[177ペ]

(39) 今日平川ニ出テ、此間ノ旅愁ヲスツト散尽タソ。[341ペ]

(40) ヤカテ、打掩テ、イキヲホツトツイテ、歌ヨリ外ノ事ハ、無ソ。[179ペ]

(41) 馬ニ乗テ、行処ヲ不定、フラリフラリトシテ出也。[502ペ]

(42) 此驛ニ、宿スレハ、妻子ニモ、離別スル、思イニ、堪カネテ、ウツカリトシタル也。[342ペ] 離思茫々正値秋

(43) 憤悶ニ、モミソコナワレテ、身モ、クツヲレテ、低摧シテ、クツタリト、成ル也。[191ペ]

(44) 松一本ヲ、隔テ、両方ニ、家ヲ、ツクル也、コロコロナル家ヘ入テ、ヤスミヤスミシテ。[593ペ]

(45) 未開門、サキニ、ハヤ内ノ、体ハ、スツキト見ヘタソ。[594ペ]

5　まとめと課題

以上述べてきたように、本稿では、幻雲抄における擬音語・擬態語の使用実態（13タイプで、62語計134例）を調査し、その他の抄物（116種）、及び日葡辞書との比較を通して、幻雲抄の擬音語・擬態語の性格を見てきた。すなわち、3節で述べたように、幻雲抄においては、特殊な語がある一方、多用される語形と多用される語は、当時のその他の抄物と共通している。また、4節で述べたように、室町時代の口語を基盤としている点で、幻雲抄と日葡辞書における語彙の基本的な性格の類似が窺える一方、幻雲抄において、一部用例の多い語が日葡辞書にないこと、語形上の多様性をもつこと（日葡辞書と違って幻雲抄は両方の語形をもつ語、促音が挿入された形の語、即興的につくられた語が見られる）、日葡辞書に見えない現代にまで受け継がれてきた語を含むこと、というような特色をもつ。

なお、幻雲抄は、幻雲自らの講義・講釈ではなく、幻雲が先人の三体詩に関する講義・所説などを解体・集成したものであり（1節を参照）、すでに3節に触れたように、幻雲抄がもつ特殊な語は桃源瑞仙の所説の引用中に見られるものが多い。これについて、本稿では深く議論するに及ばなかったが、今後、幻雲抄の抄文は全体として一つの均質な言語資料ではなく、どの抄者の所説の引用かによってそれぞれの抄文の性格が異なると

いう点を念頭に入れて、研究を進めていきたい。また一方、室町時代におけるその他の言語資料と比較しないと、幻雲抄の擬音語・擬態語の性格を精確に把握できない。そして、個別的な語として、抄物当時と現在とは意味が違う語（例（21）ヒヨツ（ト）など）や、抄物に普通に多用される語（3節④に示した2例以上ある語のうちキツカ〈例（20）〉やヲホヲホ〈例（23）〉など）であっても現在全く使われない語など、歴史的に変化してきた語が注目される。今後の課題としておきたい。

注

1）三体詩は通称であり、唐詩三体家法・唐賢三体家法・唐三体詩などの書名を冠する諸本がある。その詩は、形式の面から、七言絶句・七言律詩・五言律詩の三種に限られている。書名の「三体」とはこの三種の詩形を意味する。作品数・作者数は本により多少の出入があるが、約167名の作品486首～494首をおさめるという（坪井〈1977〉616ペ）。

2）伝来の時期について、坪井（1977〈618ペ〉）では南北朝時代に遡るとしているが、谷澤（1977〈627ペ〉）では実のところは判然としないとしている。詳細は両著を参照されたい。

3）ただ、谷澤（1977）に指摘された諸本中の（1）（2）（3）（14）は、それぞれ坪井（1977）の㊀㊅㊉㊇の諸本にあたるものと見られ、また、（4）は『三体詩幻雲抄』そのものである。両著の指摘をあわせると18種となる。

4）坪井（〈1977〉619ペ）によれば、日本に見られる三体詩のテキストとして、a季昌本または古本と呼ばれる裴庾の注の三巻本、b天隠の注の二十巻本、c天隠注に裴庾注を増注したもの、の三種がある。このうち、c本が本稿で研究対象とした幻雲抄の原典テキストで、日本において最も流布したものである。なお、幻雲抄は、原典テキスト全巻を対象にしたのではなく、巻一における絶句体の実接類と虚接類におさめた約83名の詩人の173首を対象に、注釈を行っているものである。

5）用例の示し方は、以下のとおりである。

・［　］中に、テキストにおける用例の所在頁数を示す。

・用例の意味を理解しにくい場合は、例（1）（3）などのように、［　］後に原漢文（抄文に対応する原典の詩文）を記しておく。

・例文はできるだけテキストのとおりに写すが、以下の事柄について断っておく。

濁点：注6）に述べるように、幻雲抄全巻を通して施さない傾向と見られるので、例（2）「ノヒノヒ…」、（3）「トコモ…」などのように濁点を施していない場合は、特に補わない。

踊り字：漢字では「々」、仮名では「ゝ」に統一する。ただし、「〳〵」は用いない。例えば、茫々（223ペ）、ヤス〳〵→ヤスヤス（例（1））、シタゝレ（470ペ）。

一部古体・異体の漢字・仮名：原則として通行の字体にあらためる。

例えば、枩→松、子→ネ。

読点（、）：基本的に朱筆による。

振仮名、返り点など：筆者の判断で省くことがある。

6）幻雲抄において、「ガラリ」（例（7））や「ネヅル」（例（19））など、墨筆による濁点例が若干見えるが、全巻を通して濁点は施さない傾向である。これについては別稿で考える。

7）ユルユルについて、それの同列語と見られるユルリ・ユルリユルリなどは抄物当時またはそれ以前の資料に使われているという場合である。これと違って、ノヒノヒ（例（2））については、同列語と考えられるノンビリが志賀直哉の『暗夜行路』において初出しており（『日本国語大辞典』〈初版〉による）、時代がかなり降っている。このような場合は、用例とすべきか否かについて更に検討する必要があるが、本稿では、同列語の現れる時期を特に問題としない。ノヒノヒのような場合も用例として認めておく。

8）表中、数字は用例数で、1例の場合は特に記さない。日葡辞書に見える語に＿＿線を引いた。また、日葡辞書により、〈　〉〔　〕中に濁音形を示した。なお、スコスコ〈スゴスゴ〉とある場合は実際の語形はスゴスゴであり、ハラリ〔パラリ〕とある場合は実際の語形はハラリ・パラリの両方であり得るということを示す。

9）なお、ほかにＡンＢ型として、次のようにツンハ（実際の語形がヅンバ）という語が2例見えるが、2例とも「入れ紙」にある例で本来の幻雲抄の抄文にあるのではない。用例の中に数えていない。

　玉子ヲ絳嚢ニ盛テ、ツンハトクレヨソ。（略）竹ノ器ニ入テ、ツンハト百束ハカリクレヨソ。[445ペ]

10）日葡辞書では、Tocu. 1, tocutocu. の項目があるが、「副詞。迅速に、または、早い時間に。Tocu suru（疾くする）迅速にする」とあるように、tocutocu は「疾く」を繰り返した語であって、（11）とは違う語である。

11）ただ、サツ（ト）は14例中ザツ（ト）を含み、ソツ（ト）は11例中「ソツトノ間」のような慣用的な用法を含んでいる。また、キツカは11例中「キツカ見ユル（170ペ）」「キツカト見ヘタ（335ペ）」といった例が4例ある。

12）14語中、エリエリについては、ほかの2例（454ペ、471ペ）も（14）と同じく「桃云」とある。また、幻雲抄134例については、抄者のわかる例のうち、桃源瑞仙の所説の引用が最も多い。希世霊彦、江西竜派、横川景三がそれに次ぐ。ほかに、月舟寿桂（幻謂・幻云）、月谷養雲（養謂）、心田清播（聴雨云）、天隠竜沢（黙云）など1、2例見える。なお、これら所説を引く禅僧の名の示し方は坪井〈1977〉625ペ～629ペに一部例示しているので、同著に従う。

　桃源瑞仙：58例。うち「桃云」50例、「桃抄」5例、「桃抄云」3例。

　希世霊彦：27例。うち「村云」22例、「村義」3例、「村義云」1例、「村点」1例。

　江西竜派：19例。うち「續翠云」15例、「續翠講云」3例、「翠云」1例。

　横川景三：4例。すべて「補云」。

13）個々の語について、抄物当時使われていた意味がすべて現代語に伝わってきたかは詳しく調べていない。ただ、上記諸例におけるような意味が、現代語にも見られる。例えば、スラリについては、現代語では（39）と同じく、「刀をすらりと抜く」「すらりと障子が開く」（（『新明解国語辞典』〈五版 2003. 12〉による）とあるように、「物事が滞り無く行われる様子」という意味が見られる。

参考文献（本稿で言及・引用したもののみ）

大坪併治（1989）『擬声語の研究』明治書院

国金順子（1975）「抄物の象徴詞」学習院大学国語国文学会誌 19

寿岳章子（1956）「擬声語の変化」西京大学学術報告『人文』第7号。後『室町時代語の表現』清文堂（1983）に再録

寿岳章子（1959，1960）「抄物の擬声・擬態語彙」京都府立大学『国語国文学会誌』1、同2。後『室町時代語の表現』清文堂（1983）に再録

鈴木雅子（1984）「擬声語・擬音語・擬態語」『研究資料日本文法　④修飾句・独立句編』明治書院

谷澤尚一（1977）「解説」中田祝夫編・抄物大系『国立国会図書館蔵三体詩素隠抄』勉誠社（1977．9）、巻末所収

坪井美樹（1977）「解説」中田祝夫編・抄物大系『内閣文庫蔵天文五年写本　三体詩幻雲抄』勉誠社（1977．6）、巻末所収

柳田征司（1971）「抄物に見える擬声擬態の副詞」『愛媛大学教育学部紀要（人文・社会科学）』第四巻第一号

山口仲美（1971）「平安時代の象徴詞」『紀要　共立女子大学短期大学部文科』14号。後『平安文学の文体の研究』明治書院（1984）に再録。

劉玲（2005）「『三体詩幻雲抄』における漢籍の引用（2）――「単一の詩文」の類――」、福井大学国語学会『国語国文学』44号
劉玲（印刷中）「『三体詩幻雲抄』における漢籍の引用（1）――「著作集」の類――」、北京師範大学日文系編『日語教育与日本学研究論叢』第二輯（2005年5月出版予定）

〈付記〉

本稿は『2004日本言語文化教育与研究国際学術研討会』（2004年8月24日於北京大学）における口頭発表の内容をもとに、加筆・修正を施したものです。本稿を執筆するにあたり、貴重な御教示を賜りました方々に、心より感謝申し上げます。

（リュウ　レイ　北京師範大学外国語言文学学院日文系　専任講師）